【高等学校の部】優秀賞

つながる

学校法人扇城学園　東九州龍谷高等学校　１年
峰　悠姫

高校一年の春、私の心臓の真横に大きな腫瘍が見つかった。今まで何の症状もなく過ごしてきた私にはとても衝撃的な出来事だった。この腫瘍があると分かったのは、学校の胸のレントゲン検査だった。病院で色々な検査を行い８センチメートルもの大きな腫瘍が私にできていることが分かった。担当の先生からは手術をしてとってみないとその腫瘍が良性なのか悪性なのかが分からないと聞いた。胸の真ん中を大きく切る開胸手術によって腫瘍を取り除き、約二週間の入院が必要だと言われた。この手術に対しての不安よりも私は入院に対する不安の方が大きかった。入院と手術をする日も決まり、私は入院する日が近づくにつれ自然と泣いてしまう日が多くなった。

私の腫瘍に対し普通であればおろおろするであろうと思っていた母は、なぜか落ち着いている様子だった。それもそのはず、私の母は看護師で今は高校の衛生看護科で看護教員をしている。私にできた腫瘍を病気の専門書や医学書で調べ私に授業をするように説明してくれるほどだ。本当に心配しているのか、他人事のように思っているのではと疑うほどだった。後に考えると母なりの強がりと、不安がこの行動につながったのではないだろうかと思う。そう思えたのは入院中の母の行動からだった。普通、子供が病気をすると母は子供の心配をしていつもより優しくしてくれたり、過保護になったりするのではと私は思っていた。しかし、私の母は毎回「病は気から。」と言って普段と変わらない接し方だった。だが、今回の入院では私への接し方がいつもとは明らかに違った。現在、新型コロナウイルス感染予防のため、入院中は面会禁止で洗濯などの荷物の受け渡しも全て看護師さんを通して間接的に行わないといけなかったため、全く母や家族に会うということが出来なかった。毎回着替えを届けてくれる時、母は着替えと一緒にいつもおかしや、プリン、リンゴなど私の好きなものを必ず入れてくれていた。普段の母からは考えられない行動だった。これは母なりに娘を心配してくれているサインだったのではと私は思う。入院する前からさみしさで泣いていた私以上に実は母の方がさみしがっていたのかもしれない。

入院中家族との面会は一切できなかったが、入院生活の中で色々な人と関わることが出来た。看護師さん、お医者さん、そして同室になった他の患者さんと色々な会話をして人と人とのつながりは何がきっかけで始まるかわからないと思った。同室になった70代のおばあさんが私のことを孫のようだと気遣って声をかけてくれ、毎日いろいろな話をした、そのおかげで入院生活のさみしさが少し減ったように思えた。だが、そのおばあさんの病状も安定し退院してしまった。短い間だったが私はおばあさんの退院がさみしく手紙を書いておばあさんに渡した。これがよく言う一期一会というのだと思った。

今回の病気で入院し新型コロナウイルス感染予防で面会できず、さらに深まった親子の絆。70代のおばあさんとの絆。どんなきっかけでも人との絆はつながると思った。今回病気になったことは、私に絆を学ばせてくれる大きな経験となった。私の胸には今、大きな手術の跡がある。この傷を見るたび、人との絆はどこでもつながるチャンスがあることを思い出させてくれるだろう。